

ATLウイルス感染者(抗ATLA抗体陽性者)の 分娩・産褥における管理

水野正彦*, 吉川裕之*, 藤井知行*

ATLウイルスの感染が妊婦の血液や母乳を介して成立するか否か、未だ明らかではないことから、分娩・産褥における管理方針を確立するには、一定の方針を立ててある期間管理し、その結果を検討することが、必要である。

以下に東京大学産科婦人科におけるATLウイルス感染者の分娩・産褥における管理方針を示す。

1. 分娩時の管理

分娩に際しては必ず妊婦からの出血が起こるが、この血液がどの程度の感染力を有するのか明らかでないことから、帝王切開の場合も含めて分娩時には、感染者の血液が強い感染力を有すると考えられているB型肝炎ウイルスキャリア、中でもe抗原陽性キャリアに準じて管理するのが安全である。

そこでまず分娩においては第I期より出血があるのが普通であることから、入院時より

個室の分娩室に入室させ、一般の陣痛室は使用しない。室内では、妊婦、医師、助産婦等すべての者が専用スリッパを用いるようにし、入り口で履き代えている。

また、分娩時に使用する布、ガウン、手袋、注射器等はすべてディスポーザブルを使用し、トラウベ、分娩監視装置の探触子およびベルト等、ディスポーザブルにできないものは感染者専用のもを用い、分娩後消毒する。こうした器具の消毒や、分娩台、分娩室の床の消毒には0.1%次亜塩素酸ナトリウム水を用いている。

医師および助産婦への感染事故を防ぐため、分娩に際しては必ずガウンおよび手袋を着用する。万一注射針による穿刺事故等感染の機会があった場合は、その後半年に1回血清中の抗ATLA抗体を検査するようにしている。現在までに2例の注射針穿刺事故があったが、いずれも抗体は陽転していない(1例は2年

*東京大学産科婦人科(Department of Obstetrics and Gynecology, University of Tokyo)

経過、もう1例は半年経過)。

また分娩に際しては、母体血および臍帯血を採取(一部ヘパリン採血)し、血清中の抗ATLA抗体およびリンパ球中のATLウイルスを検索する。

2. 産褥期の管理

ATL感染妊婦に対しては、人工栄養による哺育を勧めている。しかし母乳中のIgAが児の感染防御に役立つことや、母乳哺育が良好な母子関係を築くという報告があるなど、母乳哺育には優れた点が多く、他方母乳を介したATLウイルスの感染性については解明されていない点もあるので、現段階では人工栄養の強制はしていない。当科で出産した症例のうち2例について、母乳哺育歴のある同胞(2才、5才と4才の計3例)を調べたところ、いずれも抗ATLA抗体は陰性であった。こうした児が今後抗体陽性となっていく可能性もあるが、現時点では人工栄養を強制しない方がよいと考えている。

人工栄養哺育、母乳哺育のいずれの場合も、新生児の抗ATLA抗体を経時的に観察していくことが必要である。また協力が得られれば、児の同胞も検査することが大切である。また母親本人が今後ATLを発症しないか、内科的に観察していくことも必要である。

a. 人工栄養哺育を希望した場合

まず母親についてはプロモクリプチン5mg/日を2週間投与し、乳汁分泌を止める。血液による汚染は少ないと考えられるが、個室管理とし、悪露の付いたパット等は他と区別して廃棄している。新生児への授乳(人工栄

養)は一般の母親と同じ部屋で行う。新生児は感染症扱いとせず、一般新生児と同様に扱う。母親が退院した後、使用していた個室内を0.1%次亜塩素酸ナトリウム水を用いて消毒する。

b. 母乳哺育を希望した場合

人工栄養の母親の管理に加え、母乳による汚染の防止が重要である。母乳中のリンパ球はATLウイルスに感染しているとの考えから母乳の付いた乳房パットは他と区別して廃棄する。また搾乳して母乳を与える場合、哺乳瓶は専用のものを用い、搾乳に際しても周囲を汚染しないよう注意する。助産婦の乳房マッサージは手袋着用で行うようにする。授乳は一般褥婦と同じ部屋で行ってよいが、母乳を他の児に与えることは禁止する。新生児は、感染症扱いとし、他の新生児から離れた場所に置く。おむつは紙おむつを使用し、沐浴は最後に行い、その後浴槽を0.1%次亜塩素酸ナトリウム水で消毒する。

以上、現段階における当科の管理方針を示したが、今後さらにATLに関する新しい知見が集積するにつれて、分娩・産褥におけるより適切な管理法が確立することが期待される。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



ATL ウイルスの感染が妊婦の血液や母乳を介して成立するか否か、未だ明らかではないことから、分娩・産褥における管理方針を確立するには、一定の方針を立ててある期間管理し、その結果を検討することが、必要である。

以下に東京大学産科婦人科における ATL ウイルス感染者の分娩・産褥における管理方針を示す。